

古賀の石碑

【一厘貯金之碑】（久保）

明治26年（1893）5月27日、席内村久保太郎丸集落で、矢野治三郎の提唱により、当時の組合13戸で「一戸・一日・一厘貯金」（厘は当時の貨幣：円の1000分の1、銭の10分の1）運動が始められた。

矢野は「金花を眺めるは延寿なり（金は銭、花は菜種の花つまり収穫を指していたといわれ、お金が貯まること自体を長寿楽とみていた）」を信条とし、農民には娯楽がなければならぬと考えるなか、勤勉貯蓄の心を養うと同時に、楽しみながら貯めることを推奨したのである。

“塵も積もれば山となる”を精神的支えとして、貯まったお金で田畑を購入、共同浴場や稚蚕飼育場なども作った。また設立記念日（5月27日）を「遊びの記念日」とし、この日は共同浴場で朝風呂に入り、稚蚕飼育場で昼食をとり、地域住民が揃って農作業を休み、一日をゆっくり楽しんだという。

碑は昭和8年（1933）4月に建立。高さは本体137cm、台座107cm。台座には発起者20人の氏名が列記。当初太郎丸バス停付近の稚蚕飼育場の傍にあったが、現在は久保506番地付近に移設されている。

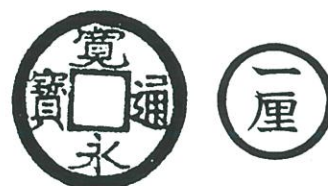
この太郎丸組合の1戸1日1厘貯金は当時話題になり、『文芸春秋』昭和17年（1942）新年号で、優良町村として紹介された。



一厘貯金之碑

碑の構成

表面には上段に「寛永通宝」の浮彫、下段に一厘貯金之碑と刻まれている。これは、当時寛永通宝が明治期に入ってもなお貨幣としての効力が認められ、真鍮四文銭は2厘、銅製一文銭は1厘硬貨として法的に通用していた（一厘単位の貨幣としては一文銭がむしろ主役であった）ことからである。



寛永通宝と一厘硬貨

裏面：「太郎丸組合は久保区及び筵内村に永年功労ありし故矢野治三郎氏の主唱により左の趣旨のもとに一厘貯金の実行をなすものなり。」



諺に塵も積れば山となる、と僅か一滴の水より起りても末は大河となるものなり。されば初の程は如何に煩はしくとも厭はず屈せず、親は子に子は孫に子々孫々是を譲りて止めざれば遂には思はわざる貯蓄となるべし。凡て人には不時災難あるものなれば常に貯蓄に心がくべきは言ふ迄もなき事なり。

依りて勤勉貯蓄の心を養ふため明治二十六年五月より組合協同一致して毎日一戸一厘宛の貯金をなすものなり。是後世迄も家名を残す所以にして現在の者発起しおく時は子孫亦必ず継続履行して目的を達する事は信じて疑はず

昭和八年四月此の碑を建つ 筵内産業組合長 渋田清一郎謹書

参考：『糟屋農業協同組合史』 1993

「路傍の石碑から古賀の近現代史がみえてくる」古賀市史跡案内ボランティア10周年記念誌 2011.3

【横山白虹先生句碑】（薬王寺）

影踏みの

子が地に置き 螢籠

白虹



鬼王荘玄関前庭に建つ句碑

古賀市内にある唯一の文学碑であり、傍らに「句碑由来碑」が建っている。

横山白虹先生句碑

白虹先生は昭和二十三年五月、古賀の地を踏まれて以来たびたびこの地薬王寺に於て俳句会を開催され、多くの人材を世に送るとともに現代句協会々長として俳句文学の興隆につくされている。私達はここに子弟の意を結集して句碑を建立する。

昭和五十七年十一月吉日 野間口一夫 謹書

横山白虹は本名横山健夫、明治32年（1899）東京生まれ。昭和58年（1983）11月18日没。享年85歳。旧制第一高等学校在学中に川端康成らと詩の会を創って文学に親しみ、北原白秋らに指導を受けたという。白虹の俳号は、指導を受けた北原白秋と川路柳虹に因んでいる。九州帝国大学医学部に進んで「九大俳句会」を設立。大正13年（1924）同大学を卒業後、小倉市（現在の北九州市）で外科医院を開業。

昭和2年（1927）吉岡禅寺洞が主宰する「天の川」に加入して編集を担当し、門下筆頭になった。昭和12年（1937）「自鳴鐘（とけい）」を主宰創刊したが、同14年に休刊。昭和23年（1948）に「自鳴鐘（じめいしょう）」復刊。「復刊の辞」で「叛逆的精神は純情孤高の精神に通じる・・・」と宣言して、現代俳句界の革新・進展をめざした。新興俳句運動の代表作家。

戦後に病院が類焼して以後、俳人として新興俳句運動の推進と後進の指導に努め、また小倉市議会議員として政界でも活躍、合併直前の小倉市議会議長を務めた。さらに、北九州市が誕生すると北九州文化連盟を創設し20年間会長を務めるなど、地域の文化界のリーダーでもあった。

昭和48年（1973）より現代俳句協会会長として俳句の振興に努めた。石碑の句は昭和49年（1974）の『旅程』に収録されている。

代表的な句には

雪霏々と舷梯のぼる眸ぬれたり
霧青し双手を人に差しのぼす
稜線を刻々鎮め月のぼる
虹鱒を霧の草生に釣りおろす
などがある。



参考：『福岡県文学事典』勉誠出版 2010

「路傍の石碑から古賀の近現代史がみえてくる」古賀市史跡案内ボランティア10周年記念誌 2011.3